「HERO BADGE」の提案
―誰もが生きやすい社会へ―

松山 陽香
［指導教員：武庫川女子大学講師　北原 摩留］

キーワード：助け合い，社会デザイン，社会課題，救済

1. 制作の背景

1-1　課題の選定

日本において「社会的弱者」とされる人々の生きづらさを課題とした。「社会的弱者」とは，人種・性別・持病などのために，生活水準・社会活動への参加・社会的評価が不利となる人々のことである。

1-2　なぜ課題となっているのか

「社会的弱者」とされる人々の生きづらさが改善されていない理由は，社会の支援が正しく行き届いていないからだと考える。

これまでに社会が彼らに行った支援のひとつとして，ヘルプマークやマタニティマークなどに見られるマーク（以下「サポートマーク」と称する）の作成が挙げられる。サポートマークとは，ハンディキャップを持つために日常生活を送ることが困難な人々が，周囲から配慮や援助を得やすくするために身に付ける，「手助け」を必要とするマークである。しかし，前述のとおりサポートマークの支援は正しく行き届いていないことが推測される。障がい者総合研究所の調べによると，ヘルプマークが役に立っていないと感じている利用者は，54％と半数を超えている[1)]。たしかに，周囲の人はサポートマークを身に付けている人を見かけた場合，交通機関では席を譲るといった配慮をしているが，彼らに何らかのトラブルが起きている場合は助け方が分からず眺めているだけとなっている現状を感じる。

すなわちサポートマークは，持ち主が何者であるかといった属性を示す役割を果たしている一方で，具体的な助けてほしい内容を示していないことから「持ち主が求めている支援」と「周囲の人が求められていると考える支援」に相違が発生し，適切な手助けに繋げる役割を果たしていない。

このサポートマークの問題に注目し，現在よりも多くの困っている人が救済され，誰もが生きやすい社会となる提案をする。

2. 制作の目的

国・行政・企業などは，全ての人が平等な生活を送るための法律の整備，SDGsなどの国際的な取り組みを行っているが，私たちの身近なところに困っている人は大勢いる。そこで，私たちが一個人レベルで目の前の困っている人に手を差し伸べることで，社会の取組を補完する仕組みを構築する。

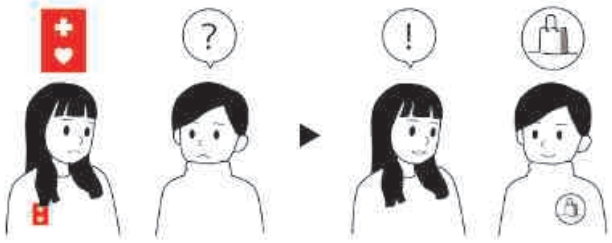
3. 「HERO BADGE」の提案

3-1　概要

「HERO BADGE」とは，困っている人を助けたい人が身に付ける，自分の手助け可能なことを示したバッジである。

3-2　特徴

(1) 助けたい人が身に付ける　これまでのサポートマークは，持ち主が何を困っているのかが分からず助けることができなかった。対して「HERO BADGE」は，助けたい側が意思表示をすることで困っている人から助けを求めることができる。



(2) 助ける内容を細分化　マークは助ける内容を細分化し，具体的に示している。今回作成したマークは，①通訳，②女性保護，③車椅子補助，④AED使用，⑤医療従事者，⑥手話，⑦道案内，⑧手荷物運びの計8種類である。これにより，困り事と手助けの内容に認識の相違がなくなる。

(3) 日常的に身に付けやすいデザイン　これまでのサポートマークは，周囲に援助が必要だと伝える必要があることから，分かりやすさを重視したデザインであった。対して「HERO BADGE」は助ける側が身に付けるものであることから，周囲にアピールする必要性は低く，多くの人の参加が必要であるため，誰もが日常的に身につけやすいことを重視したデザインとした。

3-3　持続可能にするための取り組み

(1) マッチングアプリ「HERO MAP」　「HERO MAP」とは，「HERO BADGE」と連携した，助けたい人と困っている人を探すことができるマッチングアプリである。「HERO BADGE」を身に付けている人，あるいは助けを必要とする人の位置情報が，アプリ上で共有され，マップに表示される。助けたい人が「HERO BADGE」を身に付けているだけでは，困っている人とのマッチングが難しい。このアプリで助け合いの実現性を高める。

(2) 啓蒙ポスター　活動への参加を促すために，駅や施設にポスターを設置することで認知度を高める。

4. 今後の課題

4-1　マネタイズ

バッジやアプリの作成維持費は合計1,000万円以上となる。クラウドファンディングや，企業にスポンサーとなってもらい，バッジに企業名を入れ込むことも検討している。

4-2　目の不自由な人の参加方法

今回の提案では，目の不自由な人の参加が難しい。「HERO MAP」に音声読み上げ機能・音声認識機能を追加することなどを検討している。

5. まとめ

最も大切なことは，「HERO BADGE」の活動により，助け合いを起こすことをゴールとするのではなく，助けが欲しいと思った人が手を伸ばせば身近に助けてもらえる環境を作ることである。その世界が実現した時にはじめて「社会的弱者」という概念がなくなるだろう。

注及び参考文献

1) 障がい者総合研究所，http://www.gp-sri.jp/report/detail029.html（2017/11/1）

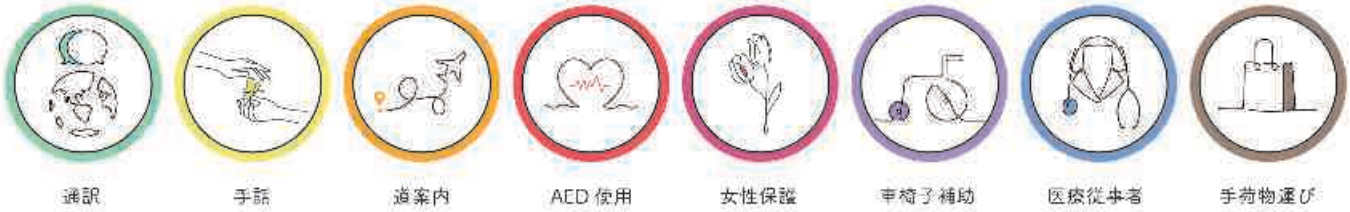


図1　バッジ

図2　使用例

図3　HERO MAP

図4　ポスター